

DIGIPRE REPORT

..... 芸術と技術が融合して生まれる「アート&テクノロジー」の世界を紹介します。

text&photo: デジプレ編集部

Art&Technology

関西で開催された本格的な国際イベント 「デジタル・ルネッサンス in けいはんな」



Macでデザインするのが当たり前、テクノロジーを使ってアート作品を作るというのも、なんとなくフツーに思えるのですが、専門家の世界では、こうした試みはまだまじまじとばかりのもの。そんな時代の流れを背景に、デジタルの世界で今一番、注目されている「アート&テクノロジー」の融合をテーマにした、本格的な国際イベント「デジタル・ルネッサンス in けいはんな」が、けいはんな学研都市で開催されました。

講師に名を連ねているのは、MITの人工知能研究所所長や、N.Y.現代美術館(MOMA)のキュレーターなど、世界から集まった各分野トップクラスの専門家たちばかり。それだけでもすごいところを、展示会では、普段シークラフのような海外の大型イベントでしか目にすることができない作品などが惜しげもなく披露されました。なかでもATR研究所で行われた、最新鋭のコンピュータとセンシング技術を使った、インタラクティブアートの体験会は圧巻もの。参加者にとっては大きな刺激になっていたようです。

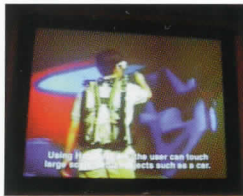


イベントに参加した講師陣。静々たる顔触れが並ぶ。

けいはんな学研都市では、今回の成功をきっかけに、これからも毎年、このような国際イベントを開催していくことですので、ホームページはこれからも要チェックです。



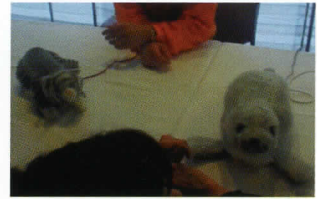
「無意識の流れ」は、人の深層意識をテーマにして作られた土佐尚子さんの最新作。指に付けられた心拍センサーと位置センサーから読み取れるデータに反応して、水の中を泳ぐCGの魚たちが、仲よくなったり、ケンカをしたり。99年のシークラフに発表し、絶賛された作品です。



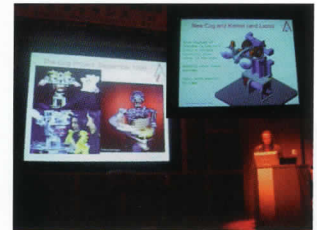
ヴァーチャルリアリティの中でも疑似的な触感を再現するための技術もどんどん研究が進んでいる。写真はそのひとつで東大の廣瀬道孝教授が開発中の「Haptic Display」。



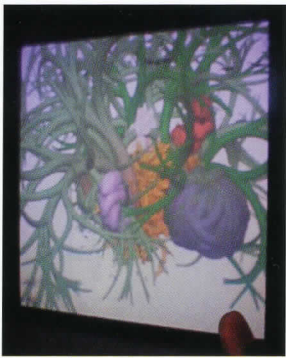
展示会場のひとつATR研究所では、観客がバーチャルキャラクターになって出演者になるというインタラクティブシネマも紹介されました。さまざまなセンサーを取り付けた衣装を着た出演者の姿は、シェークスピアというよりもマトリクスという感じ(笑)。



さわったり、話しかけたりしながら、育ていく猫型ロボットの「タマ」とあざらし型ロボットの「ごま」。AIBOとはひと味違った。愛らしさは、これから人気が出そう? どちらも通商産業省工業技術院機械技術研究所の柴田崇徳氏が企業と共同で開発したものです。



MIT人工知能研究所のロドニー・ブルックス所長は、同研究所が行っている「The COG Project」のロボットを紹介。このロボットは、人間の子どもと同じように体験しながら、運動や環境を学習する機能を備えているそうです。未来のATMはここから生まれそう?



共同で作品を発表し続けているアーティスト、クリスタ・ソムラ氏とローラン・ミノノー氏の作品のひとつ「Life Species II」は、コンピュータの中に生まれた仮想生物を、キーボードで打ち込まれた文字をえさにして育てていくというもの。生物の種類によって食べられるえさ(アスキーコード)が決まっています。大きくなると子供を産んだりもする。こちらは、インターネット上で体験できるようになっているそうです。



スーパーコンピュータ「MUSE」と対話しながら連歌をたのしむ「インタラクティブボエム」という作品では、制作に詩人の谷川俊太郎氏をはじめ、シナリオライター、声優、音楽家らが制作に参加したそうです。

「デジプレ」

メディアはもっとアグレッシブになれる ~IMI-AiR-99 公開レクチャー~

「急進未来予想図ーネットワーク社会の自律性」

大阪南港のWTCにあるインターメディアム研究所(IMI)が、公開レクチャー「IMI-AiR-99」をパナソニック デジタル アートスクエアで開催しました。講師のヘアート・ロヴィンク氏は、オランダはアムステルダム在住のメディア理論家で、毎年、IMIにゲストとして来日しています。今回は、ロヴィンク氏がやっているアムステルダムのフリーネット「デジタルシティ」の活動や、ヨーロッパの国境付近で生活する避難民の支援をするアーティスト「アクティヴィスト」達のキャンペーンなどが紹介されました。

ロヴィンク氏らアクティヴィスト達の活動は、社会に対してどうやって発言のチャンスを持つかが目的の一つとしています。彼らはフリーラジオと呼ばれるコミュニティFMや、インターネットを組み合わせ、これまで以上にバワフルなメディアの使い方をしています。「何かを発言するという場合、最先端のデジタル技術もアナログも関係なく、その人や状況に合わせたメディアが使えることが大切なんです」というロヴィンク氏の言葉は、メディアが持っている本当の力や、可能性について、深く考えさせられるものでした。

<URL><http://www.iminet.oc.jp/air99/lecture.html></URL>



講師のロヴィンク氏は、「デジタルシティ」をはじめ、95年には「ネットタイム」という国際的なグループを立ち上げたり、メーリングリストによるメディア批評や会議、出版などを行っています。現在の活動基盤は新旧メディア協会(アムステルダム)で、「ネクストファイブミニッツ」や「アールスエレクトロニカ」などの国際会議のオーガナイズも行っているそうです。



国境付近で行われたアクティビストらによるキャンペーンの1場面。200台のコンピュータをLANでつないで情報発信したり、ハッキングしたり、さまざまな活動を行っていました。



アクティビスト達の活動は、政治や社会的なもののばかりではなく、ネットワーク社会に対するものもあります。キャンプではなぜかマイクロソフトへの反発を示す活動もあったとか。



自由に使えるメディアのひとつとして、インターネットと並んで注目されているのがラジオの存在。最近ではインターネットと組み合わせ、リクエストをチャットやメールで受け付けたり、時にはMP3データがそのまま送られてくることもあるそうです。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩